

ホルン音楽の歴史の中において、古典派はホルン書法が最も大きく変化した時期であった。しかしこのホルン史にとって重要な時期も、過去の研究においては狩猟ホルンが芸術音楽に導入され、ハンドストップ奏法を経てやがてヴァルブ・ホルンへ、という流れの中の一部として、その事実だけが経過的に述べられてきたものが多かった。実際に、ホルン史の研究に関しての大著とされるモーリー＝ベッグやフィッツパトリックの研究も、確かにバロック期以降のホルン書法を順を追って詳しく説明していた。しかしこれらの研究も、特にハンドストップ奏法が導入されてから初期ロマン派にかけてのホルン書法が、音楽的に及ぼした影響について詳しく触れてはいなかった。そこに述べられていたのは、ハンドストップ奏法が実際にどの様に用いられていたかということにとどまっており、またその説明にはホルン協奏曲だけでなく交響曲や室内楽のジャンルからも譜例を引用しているものの、それぞれのジャンル間に見られるホルン書法を通じての関連や影響は、あまり取り上げられていなかったと言える。

また、特定の時代に限定したホルン書法の研究は、例えばヴォルフガング・アマデウス・モーツアルトのような特定の作曲家個人の作品研究である場合が多かった。『モーツアルト年鑑』のミュラーの研究も、モーツアルトのホルン協奏曲に用いられているホルン書法を詳しく述べていたが、同時代の作曲家によるホルン音楽との比較はなされていなかった。

同じように、交響曲におけるホルン書法を扱ったものも少なかったと言える。交響曲の歴史を概観している本は多く出版されているが、それらは交響曲の変遷についての本であった。

そこで今回の研究では、古典派のホルン協奏曲をホルン書法の観点で分析することを出発点として、主に古典派後期中で起こったホルン書法の変遷を考察した。その出発点となった題材は、カール・シュターミツのホルン協奏曲と、アントニオ・ロゼッティ、ジョヴァンニ・プントがシュターミツの作品と同一の音楽素材を利用した（あるいは書き換えをした）ホルン協奏曲である。

この論文の第1章では古典派のホルン音楽における一般的な概念を述べた。ハンドストップ奏法が1750年頃に導入されて発展していった過程と、ヴィルトゥオーソ性の違いによるホルン書法の分類とハンドストップ奏法の関係を説明した。

第2章では、先にあげたシュターミツのホルン協奏曲と、それを書き換えたロゼッティとプントのホルン協奏曲の間に見られたホルン書法の違いを比較することから始めた。そしてこの書き換えの背景に見られる、ホルン書法の変遷との関連について触れるために、この比較に続けてロゼッティやプントによる他のホルン協奏曲を取り上げ、さらに古典派の初期から末期に至る他の作曲家の協奏曲にも触れた。具体的にはL. モーツアルト、F. J. ハイドン、M. ハイドン、W. A. モーツアルト、F. ダンツィ、C. M. von ウェーバーの作品を取り上げた。

第2章で古典派のホルン書法の変遷を、協奏曲のジャンルに限って述べたが、第3章で

は交響曲、室内楽のジャンルにおけるホルン書法を概観した。ここでは、交響曲としてはL. モーツァルト、G. M. モン、J. シュターミツ、F. J. ハイドンの作品を、室内楽ではF. J. ハイドン、C. シュターミツ、W. A. モーツァルト、L. van ベートーヴェンの作品を取り上げた。

同一素材によるホルン協奏曲比較から出発して、次第に取り上げるホルン音楽の分野を広げてきたものをまとめた。第2章からは、ロゼッティ以前と以降の協奏曲でハンドストップ奏法の水準が違っていることを指摘する事ができた。次に協奏曲と交響曲の間に見られるホルン書法における影響を考えたとき、そこにはロゼッティと彼の前後のホルン協奏曲との間に類似した関係があることが分かった。さらに室内楽では、ハンドストップ奏法は協奏曲と同じ位の時期に導入され始めたが、低音域でのストップ奏法の発展があまり見られなかったことが分かった。

このようにして、ホルン書法の観点から18世紀末の音楽を概観しても、協奏曲と交響曲、室内楽の分野の間に見られる関係、あるいは影響を見ることができた。それはこの時期にホルンが最も大きな変貌を遂げたためであり、その原動力ともなったのがハンドストップ奏法が導入されて発展していった過程であった。このように考えたとき、題材として取り上げたカール・シュターミツのホルン協奏曲と、ロゼッティとプントによる書き換えの問題は、古典派におけるホルン書法の大きな変遷を物語る、1つのアспектとなり得る事が認められた。